

市ノ瀬遺跡発掘調査概報

1987. 3

社団法人 和歌山県文化財研究会

序

和歌山県土木部が、西牟婁郡上富田町市ノ瀬に予定している富田川中小河川改修工事に伴い、予定地内に所在する市ノ瀬遺跡について、埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

市ノ瀬地区は、かねてより弥生時代の遺物が出土したり、中世紀南地方の豪族山本氏が本拠地としていた地域であります。故に近在には『竜松山城跡』、『坂本付城跡』、家老屋敷跡等の城館跡が、遺跡或いは伝称の地として存在しております。また、熊野参詣道もこの地域を縦貫しており、九十九王子社の一つ『一ノ瀬王子社』が存在する所であります。

今般の発掘調査におきましては、縄文時代・弥生時代を中心に室町時代の遺構・遺物が多数出土し、また発掘作業に従事して頂いた方が、畑耕作中に『石包丁』を発見するなど、学術上はもとより、文化財普及活動の一端をも担うことができ、非常に有意義な事業となりました。ここに、その概要を報告し、一般の活用に資したく存じます。

最後に、調査にあたり終始ご懇意なご指導を賜りました諸先生方をはじめ、関係各位、種々ご指導、ご協力下さった地元の皆様方に厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

社団法人和歌山県文化財研究会

会長 山東永夫

例　　言

1. 本概報は、和歌山県西牟婁郡上富田町市ノ瀬における富田川中小河川改修工事（和歌山県土木部）に関する埋蔵文化財発掘調査の概要である。
2. 本事業は、社団法人和歌山県文化財研究会が和歌山県より受託のうえ県教育委員会の指導を得て昭和62年2月から3月にかけて実施した。（担当 永光 寛・県教育庁文化財課）
3. 本遺跡は、「和歌山県遺跡地図」（県教育委員会・昭和58年3月刊）未記載の遺跡である。今回の調査を機に遺跡名称を「市ノ瀬遺跡」とする。
4. 本調査にあたっては、巽三郎氏（調査委員・県文化財保護審議会委員）、玉置善春氏、谷本圭司氏および上富田町教育委員会社会教育係、町誌編纂室、市ノ瀬支所に種々の協力・教示を得た。記して謝意を表する。

目　　次

1. 位 置 と 環 境	1
2. 調 査 方 法	2
3. 調 査 概 要	2
4. 調 査 の 成 果	4

図版目次

1 位 置 図	12 S F - 1 ・ S K - 1 (造構写真)
2 遺跡周辺図	13 S Z - 1 ・ S K - 2 (　＊　)
3 第 I ・ II 区・TR-1 (平面図)	14 土層・第 III 区 (　＊　)
4 S Z - 1 ・ S K - 1 (平面図)	15 遺物写真 ①
5 土 層 図	16 ＊ ②
6 遺物実測図 ①	17 ＊ ③
7 ＊ ②	8 ＊ ④
8 ＊ ③	19 ＊ ⑤
9 遺跡全 景	20 ＊ ⑥
10 第 I 区全 景	21 ＊ ⑦
11 遺物出土状況	

1 位置と環境

本遺跡は、和歌山県南部、白浜半島南端に河口をもつ富田川中流域に位置する。河口より約13kmの左岸沖積地（標高約34m）である。富田川は、狹少な谷合に沿って大きく蛇行を繰り返し、中辺路町・大塔村を貫流し、本遺跡付近において緩慢な流れに変わる。又、両岸から清水谷川・汗川が流入し水田地帯を形成する。

調査地点は、富田川の左岸。市ノ瀬橋上流約600mである。付近一帯は水田地帯で、幾筋もの弧状をなした畦畔が、あたかも旧氾濫原・旧河道の様相を呈している。

本遺跡を取りまく歴史的環境は、中世以前の遺跡により窺うことができる。周辺地の遺跡のありかたをみると、富田川及びそれに注ぐ小河川の形成する沖積地に少なく、河岸段丘もしくは丘陵に多く立地する傾向を示している。

縄文時代後期（平見遺跡）に始まるとされる上富田地方の遺跡は、弥生時代、特に後期末から古墳時代初頭にかけてが多く、上記の段丘・丘陵上に位置するものが多い、弥生時代中期は、3～4箇所において弥生土器・石斧・石包丁等が出土している。これらを母体とし、後期末から古墳時代初頭にかけて分村的に遺跡の増加をはかるものであろう。また、この時期において遺跡数が増加するのは、紀南地方一般の傾向と合致する。富田川両岸に各1点、計2点の銅鐸が出土している。内1点は、朝來銅鐸と呼ばれているもので近世末に出土、現在大英博物館の1号あるいは3号銅鐸に比定されてはいるものの明らかでない。他の1点は田熊遺跡より破片として出土している。

古墳時代に入ると、4世紀と考えられる朝来古墳、5世紀には山王古墳が富田川を介して対照している。

こうしてみると、何箇所かに分散していた勢力は、古墳時代には最大の平野を背景とする朝来地区がその中心的役割を果たすものとみられる。

その後、なぜか遺跡数は激減する。再び遺跡が増えるのは、中世に入ってからで、しかも、経塚・古錢出土地・城館跡等で、一般集落跡は発見例が少ない。

城館跡は、在地豪族の山本氏が、南北朝時代から豊臣秀吉による紀州征伐を受けるまで市ノ瀬の河岸段丘上に坂本付城と称されている城館を、富田川を渡った右岸丘陵上（標高102.7m）に竜松山城をそれぞれ構築している。

2 調査方法

調査の方法は、①遺跡の範囲確認を目的に、3m×3mの坪掘り（重機掘削）を10穴設定する。②工事断面より遺物が露呈している地点を全面（約240m²）にわたって、重機と手掘りによる調査を実施する。以上の2点を調査方法の基本とした。

①は、調査途中で8穴の坪掘り（以下TPと略す）を実施、残る2穴のTPに替えて、2本の試掘溝（以下TRと略す）を新たに設定した。②は、当初予想した範囲（以下第I区と称す）より西側に広がりを持つため新たに拡張区（以下第II区と称す）を設定した。また、第I区の東側工事断面（以下第III区と称す）を精査した結果、カマボコ状の石積みを認めたので、土層確認を行った。

3 調査概要

TP・TRの調査

県道を兼ねる堤防南側にTP1～5、北側にTP6～8の計8穴（約72m²）。TP1～5（水田）は、造成地を挟んで東西に設定。標高は33.7m～33.0mで東が高い。5穴とも地表面より約2mまでは砂礫の堆積層が認められる。ただし、TPごとに砂礫の有無、砂粒の大小、礫の大小或いは堆積層の厚さが異なり、非常に不安定な堆積状況を呈している。遺構・遺物は認められない。TP6は新低水護岸の南側、TP7・8は第I区の東側である。ともに砂礫の堆積からなり、一部TP7に於いて岩盤を認める。遺構・遺物なし。TR1・2は第II区の西側である。地表面（標高約34.0m）より1.6m～1.9mまでは礫層である。旧土地所有者によれば、昭和28年の水害後流失した箇所に礫を充填したという。礫層の下位は2枚の水田跡を挟んで再び砂礫の堆積が認められる。遺構・遺物なし。

第I区の調査

まず基本的層序関係を記せば、表土下約1.0mまでは、3枚の水田跡で構成されている。各水田跡は、富田川の氾濫により浸食・堆積作用が顕著に認められる。最下層の水田跡は、標高32.6mに位置するが、室町時代・弥生時代・縄文時代の各包含層及び礫層（無遺物層）・岩盤（頁岩）を削平し、水田を設けたものである。時期は、近世後半の遺構（SK-2）及び堆積土層の関係から、SK-2の廃絶後一度水害を経験したあとに設けられたもので、近世後半若しくは、末期頃に比定されよう。3枚の水田跡を除去すると、北東隅に岩盤が

現れ、それより南方向へ漸次下降する。岩盤上に堆積した土層は、上位より暗茶褐色砂質土（室町時代）、暗褐色砂質土（弥生時代後期末）、暗黒褐色粘質土（縄文時代後・晚期）、そして礫層の順序になる。

検出された遺構は、近世後半の遺構（SK-2）、室町時代にかかる石列遺構（SZ-1）、土坑（SK-1）、時期不詳の炉跡（SF-1）、縄文時代のピット（SP-1～5）5穴である。

SP-1～5 縄文時代晩期に属する。SP-1は径0.40m・深さ0.195m、SP-2は径0.25m・深さ0.14m、SP-3は径0.35m・深さ0.135m、SP-4は径0.20m・深さ0.245m、SP-5は径0.30m・深さ0.142mで、埋土はすべて暗黒褐色粘質土である。遺物は5穴ともに認められない。

SF-1 東西0.84m・南北0.57m以上・深さ0.17m以上。南端はSK-2廃絶後の水害により、一部流失している。炉の内部には焼土が2～3cmの厚さで残存しており、直径5～20cmの塊が20個程認められ、そのうち数点は熱により赤色に変化していた。土師器の細片が認められたが時期は不詳である。

SZ-1 弥生時代の包含層を切り込み、平坦面（標高32.4m）をつくりだし、その面に石を置き並べた遺構である。石の配置は隅の欠けたL字状をなし、一部に積まれた状況を呈す。長辺3.00m以上・短辺0.85m以上。石は15～30cm大で、L字に画された内部にも散乱する。遺構の全容は明らかでなく、南西方向（第Ⅱ区）へ続くが南・南東は、2度にわたる水害により流失している。遺物は陶器片・青磁（明）細片・瓦器・瓦器釜・須恵器片等が出土している。

SK-1 東西1.55m・南北1.46m・深さ0.235m。平面不整円形の土坑である。埋土は不明瞭ながら2層に分割される。上層は暗茶褐色粘質土で、下層は砂質土である。下層は室町時代の包含層と同質である。遺物は、SZ-1で出土した陶器と同一個体の破片が出土している。

SK-2 岩盤を矩形に掘り込んだ土壙である。長辺3.8m・短辺2.9m、深さは遺構面より1.0mである。埋土は含礫褐色砂質土からなる。南半は水害のため挟り込まれ、砂礫が堆積する。この砂礫層を切り込んで第一期の水田が営まれる。近世後半の染付片・摺鉢片が出土している。

第Ⅱ区の調査

第Ⅰ区調査中に、包含層及びSZ-1の全容を確認するため拡張した調査区で、第Ⅰ区

の西側に位置する。中世包含層直上まで重機掘削を行い、包含層・礫群・遺物等を確認した段階で今回は調査を一旦打切り、次年度に持ち越すこととした。

第Ⅲ区の調査

第Ⅰ区の東側約45m区間である。工事により約3.5mの崖面を作りだしている。砂礫に被られた状態で2箇所で堤防が検出された。一つは、第Ⅰ区の東に接するもので、自然石を用いた野面積み。¹いま一つは、その東側に、割り石で断面カマボコ状に葺いた堤防である。高さ約2.9m・幅約17mある。明治22年後の設置か。前者は後者よりも先行する。

造 物

出土遺物の大半は、縄文・弥生土器で、それぞれの包含層出土である。その他、土師器・須恵器・瓦器・瓦質釜(70)・瓦質火舎(71)・青磁・陶器・磁器・石鍋(73)・石鎚(75~85)・石錐(86)・石斧(74)各片及び凹石等が出土している。

縄文土器は、後期元住吉山式(12)をみることができるが、圧倒的優位を占めるのは、晚期の突帯文土器(粗製深鉢)である。そのほとんどが口縁部付近の破片である。突帯の断面は△・▷の2種類をもち、刻目を施す。刻目は○・D・V形に分かれ、口縁端部にも刻目を施すものと施さないものに分類できる。縄文土器の底部は、丸底及び平底が出土。これらと同じ包含層中に前期弥生土器(壺・口縁部片・47)と考えられる土器片が出土しているが、一点のみの小破片であるので留意点としておきたい。弥生土器の大半は、後期末のもので壺などが出土している。瓦質火舎は、上富田町で2例目(うち1例は岩田遺跡出土)で、今回のものは根来寺坊院跡SK152に類例を見る。滑石製石鍋も本町内2例(塔ノ谷遺跡)目である。

4 調査の成果

以上のことからも解るように、本遺跡は、富田川畔に営まれた集落跡である。調査地点は、その南端に当たると解せよう。つまり遺跡の中心は、富田川のなかにあって、既に消滅しており、第Ⅰ・Ⅱ区のみが水害等の現象から残り得たものである。

縄文時代後・晩期・弥生時代後期末・室町時代の各時期を中心として営まれた本遺跡は、近世に入って放棄されるのである。砂礫の堆積が富田川の河床を序々に上昇させ、近世には水害の影響を受け始めるとみられる。その後、野面積みの堤防(第Ⅲ区)が築かれ、また、水田経営の始まりもこの堤防の設置と無関係ではなかろう。

遺跡名

- 1 加茂遺跡
- 2 一瀬王子跡（県指定）
- 3 市ノ瀬遺跡
- 4 竜松山城跡
- 5 坂本付城跡
- 6 市ノ瀬石包丁出土地
- 7 中ノ岡遺跡
- 8 西行遺跡
- 9 根告田遺跡
- 10 稲葉根王子跡（県指定）
- 11 弐生土器出土地
- 12 上殿遺跡
- 13 岩田遺跡
- 14 田熊遺跡
- 15 立平遺跡
- 16 塔ノ谷遺跡
- 17 朝来古墳・経塚
- 18 生馬口遺跡
- 19 平見遺跡
- 20 山王古墳
- 21 朝来副葬出土地
- 22 日ノ熊遺跡
- 23 八上王子跡（県指定）
- 24 射矢の谷遺跡
- 25 宮代遺跡
- 26 下間遺跡

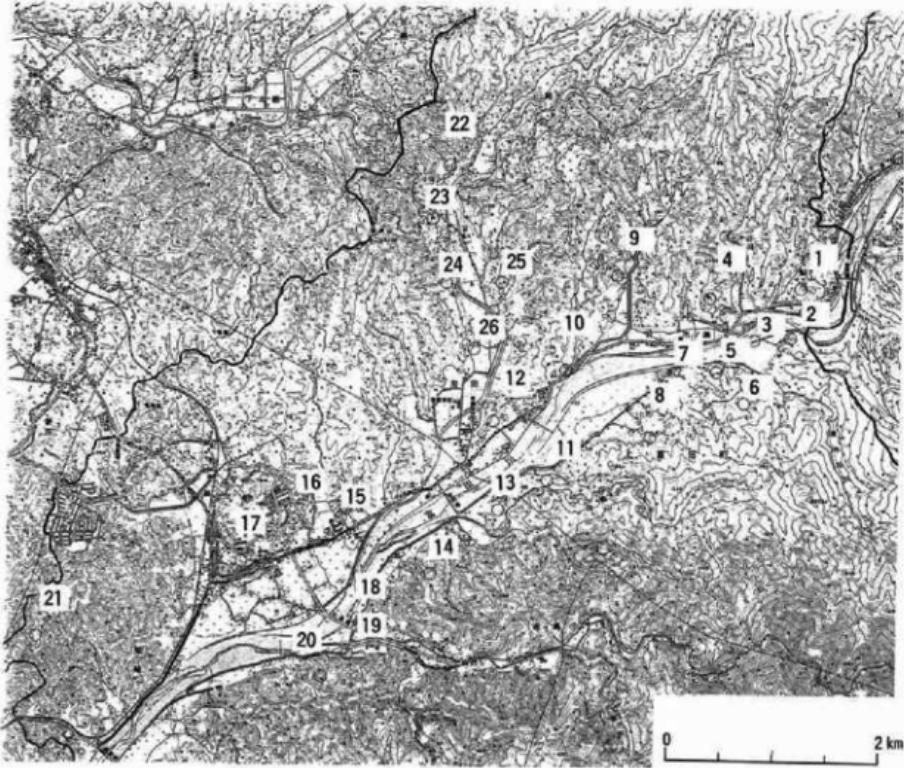
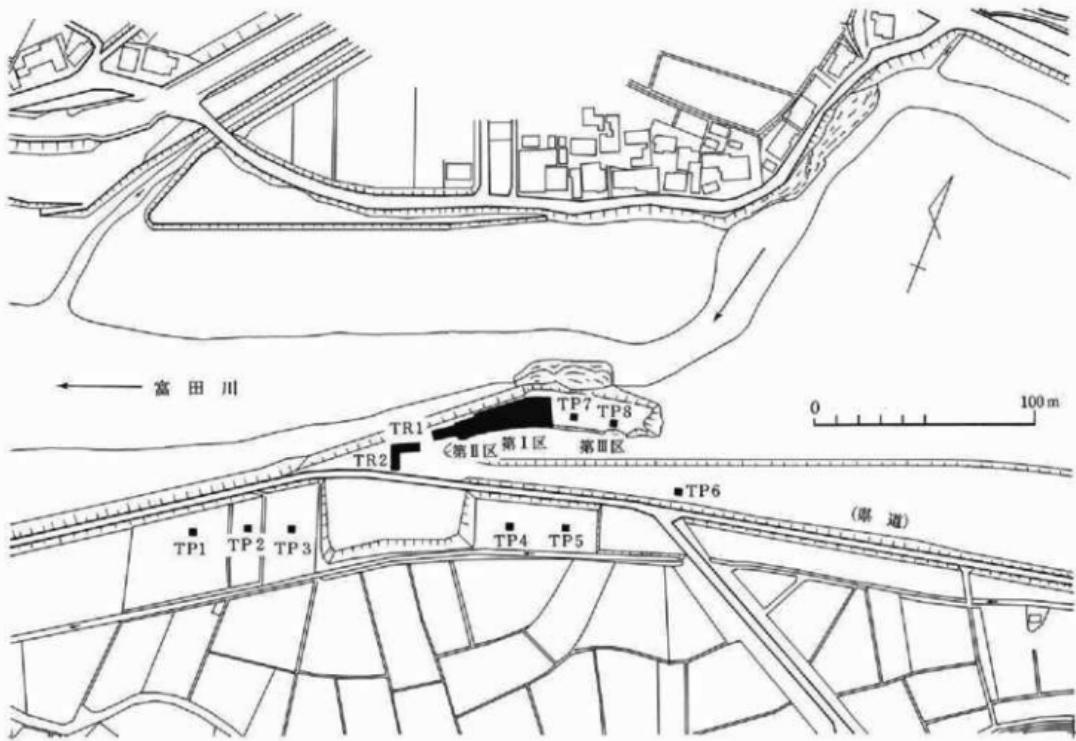
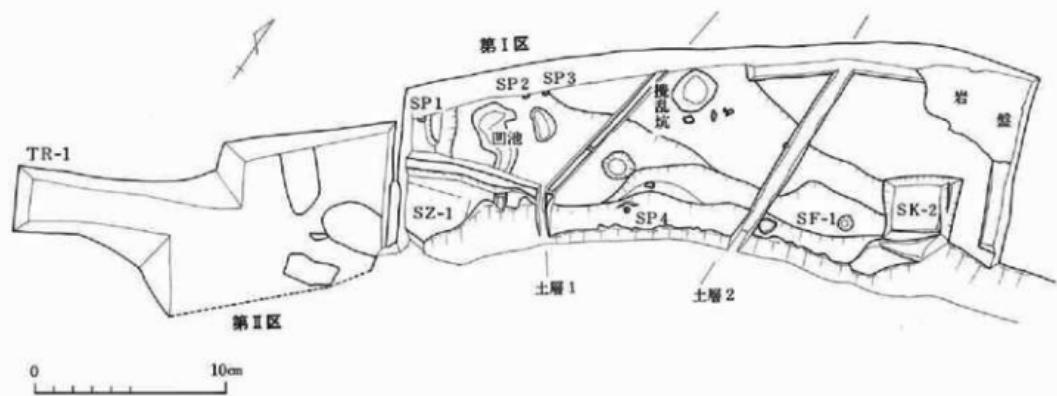


図 1 地図

図11 濱田川河川図

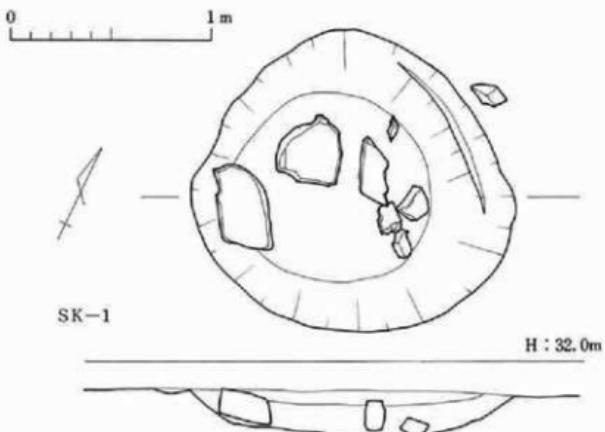
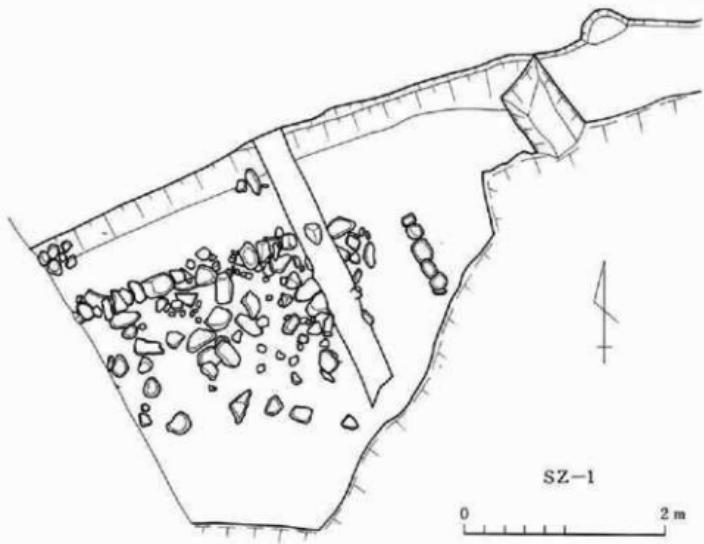




(区画图) 一一二十一・四三・一號 11断面

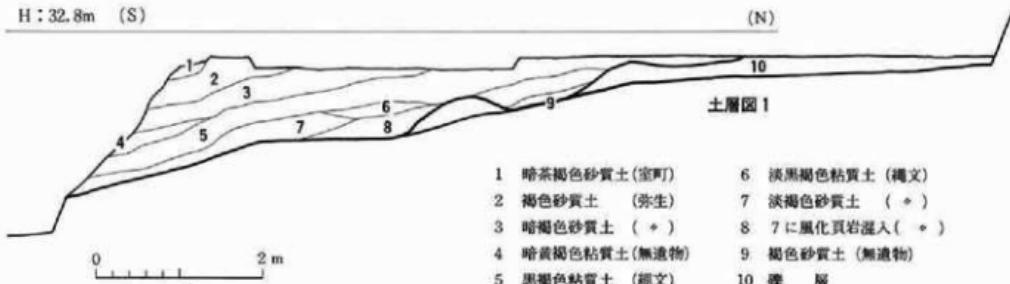
図版四

SZ-1・SK-1(平面図)



H : 32.8m (S)

(N)



H : 32.6m (S)

(N)

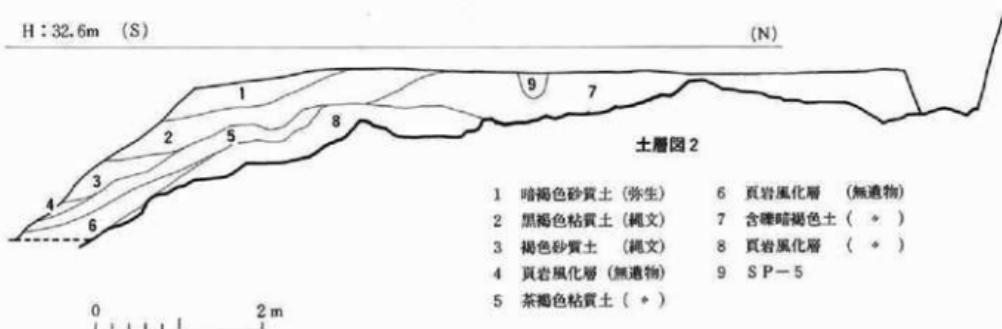
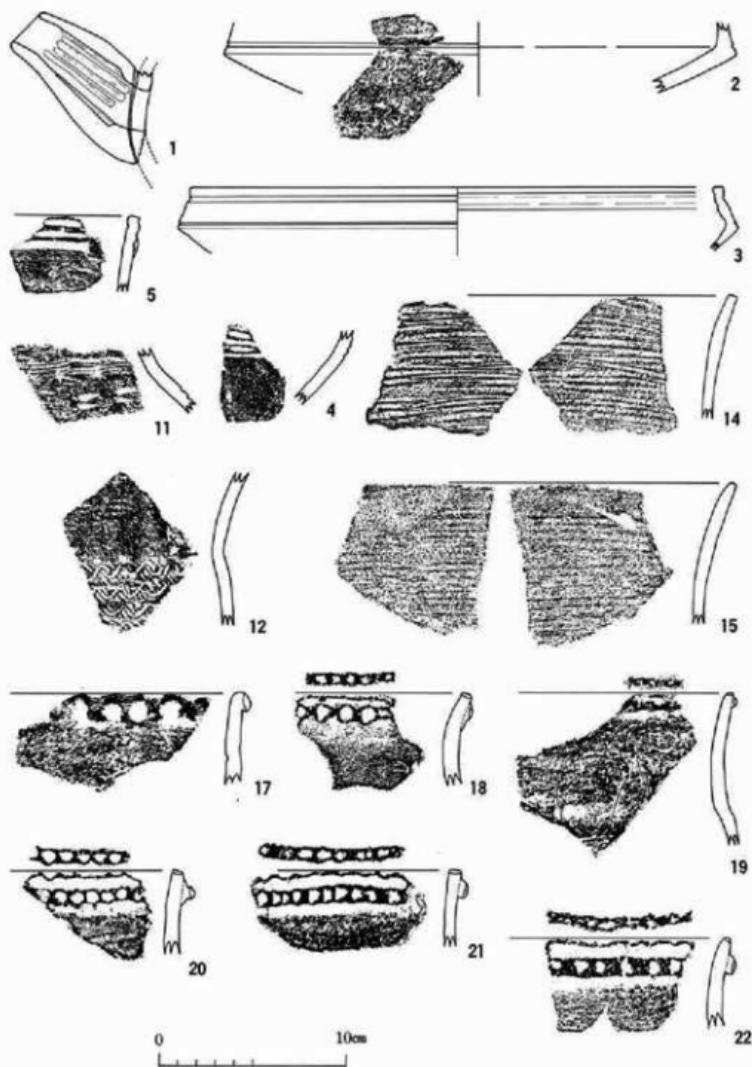


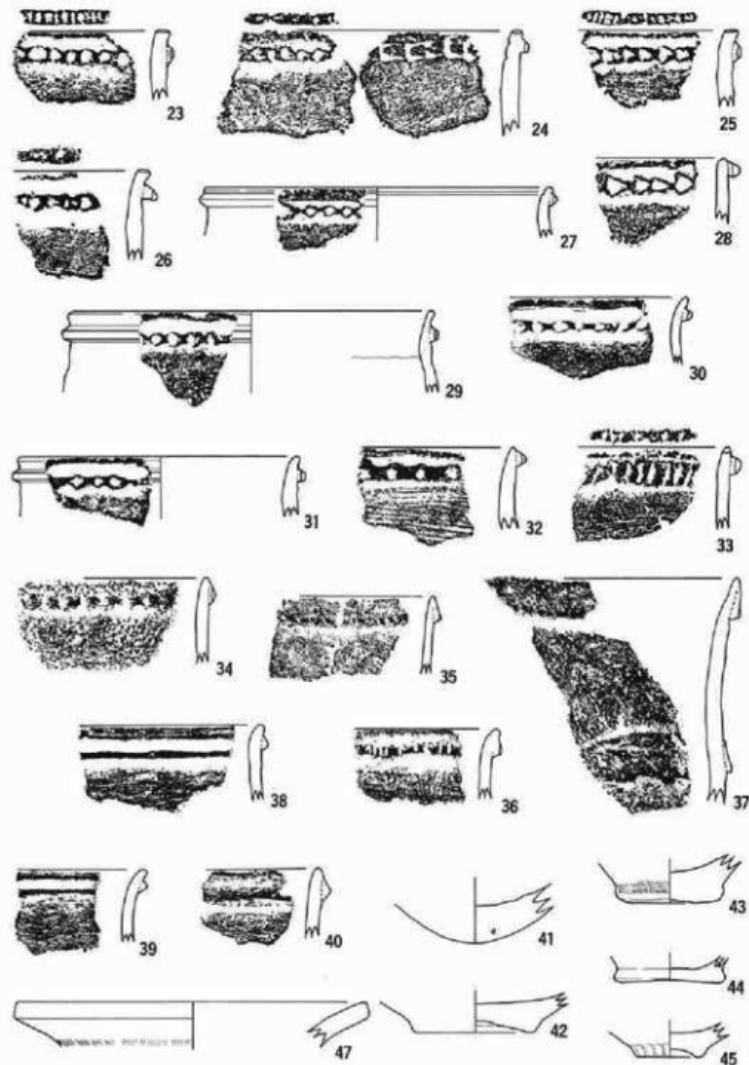
図 一四十五 土壠図

図版六 遺物実測図①



縄文包含層出土土器

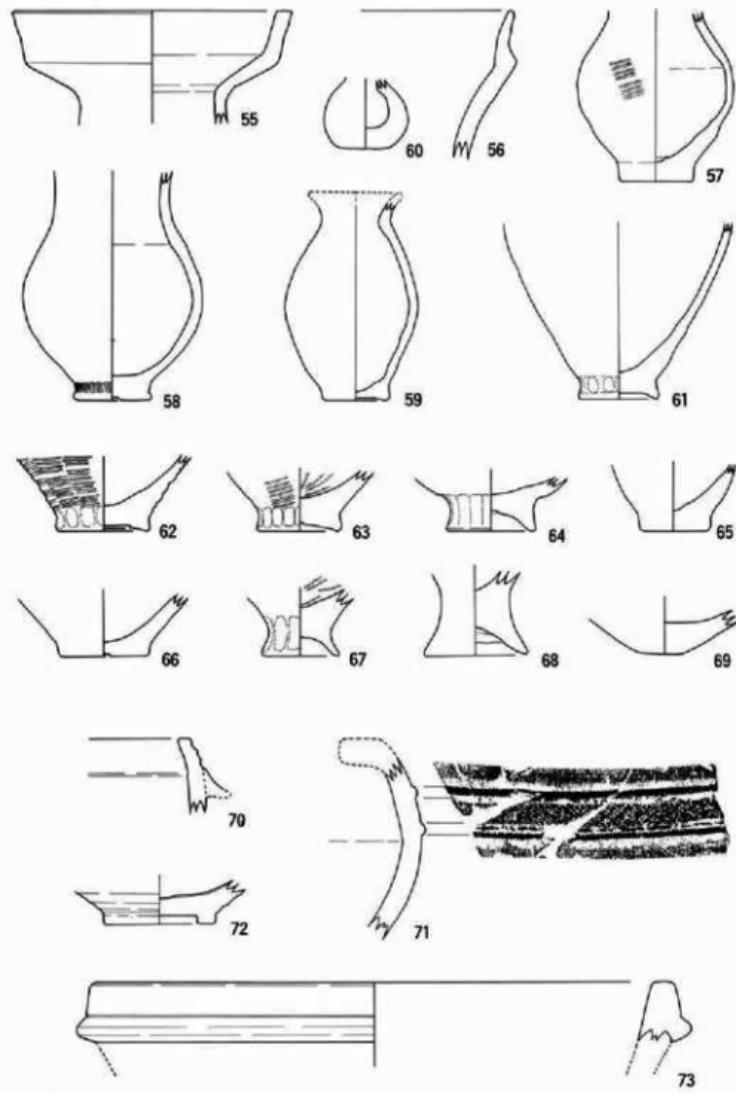
図版七 遺物実測図②



縄文包含層出土土器・弥生土器(47)

0 10m

図版八 遺物実測図③



0 10cm

弥生包含層出土器(55~69)・S Z-1(70・72)・第Ⅱ区室町時代包含層出土遺物(71・73)

図版九 遺跡 全景



上遠景 下近景

圖版一〇 第I区 全景



上 第I区全景

下 第I区調査中

図版一一 遺物出土状況



上・下 弓生土器出土状況

圖版一二 SF-1・SK-1 (遺構写真)



上 SF-1 下 SK-1

図版一二一 SZ-1・SK-2 (遺構写真)



上 SZ-1

下 SK-2

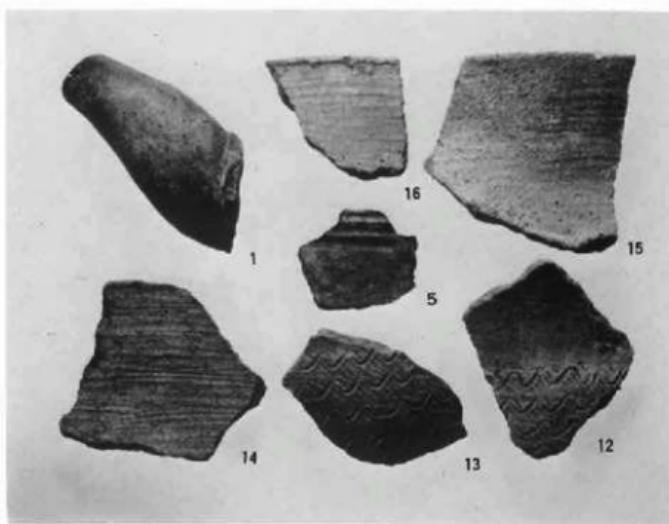
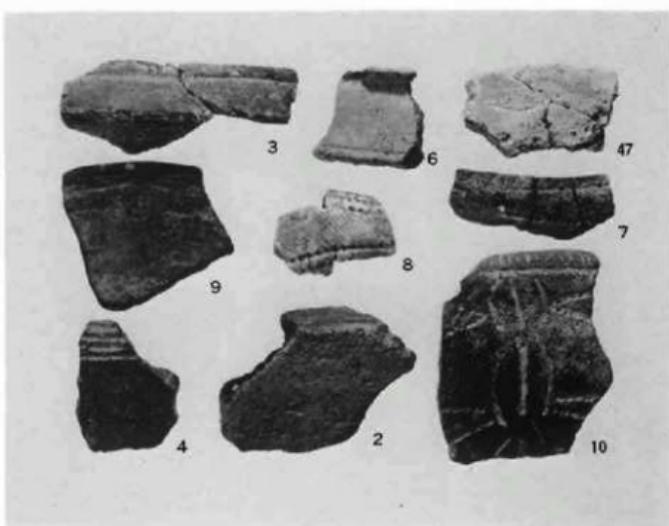
図版二四 土層・第Ⅲ区（遺構写真）



上 土層 1

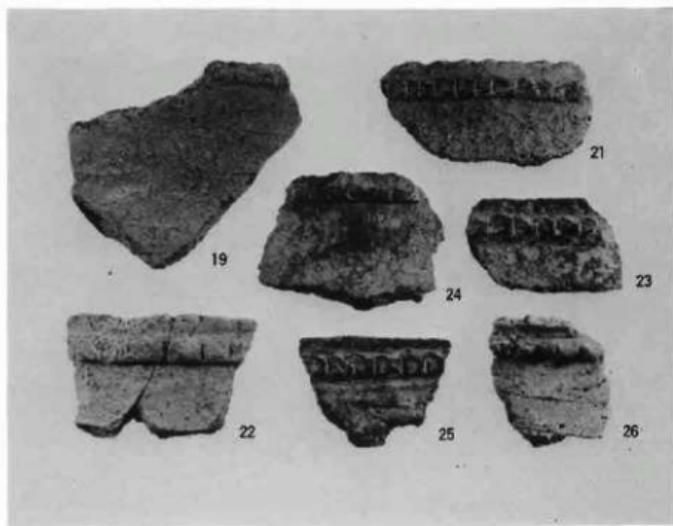
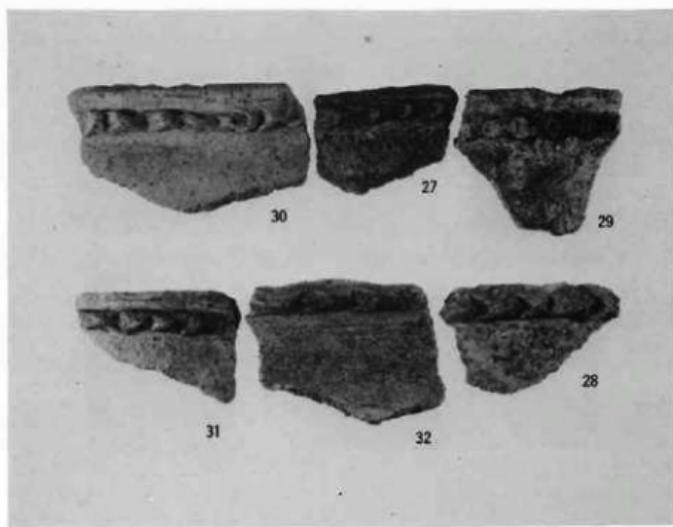
下 第Ⅲ区堤防

圖版一五 遺物寫真①



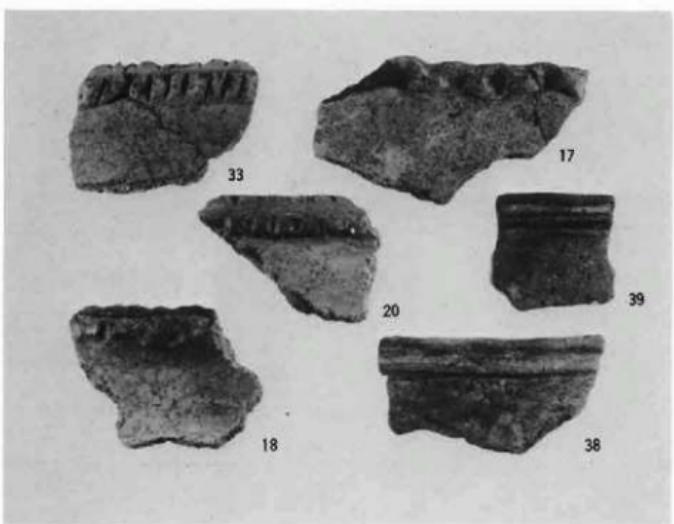
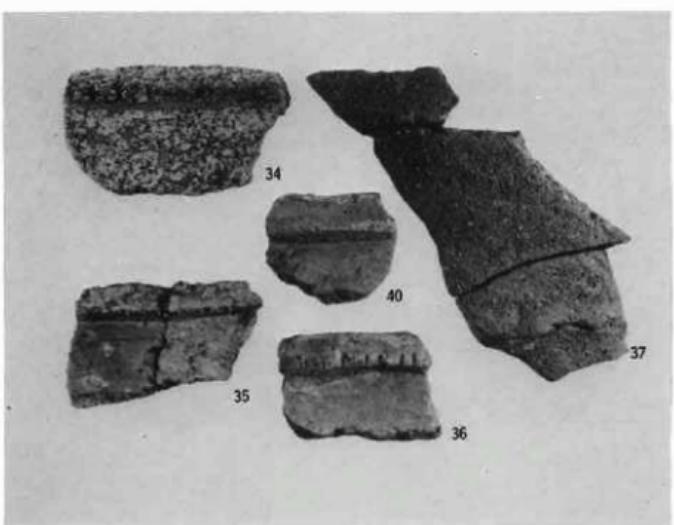
繩文包含層出土土器

圖版一六 遺物寫真 ②



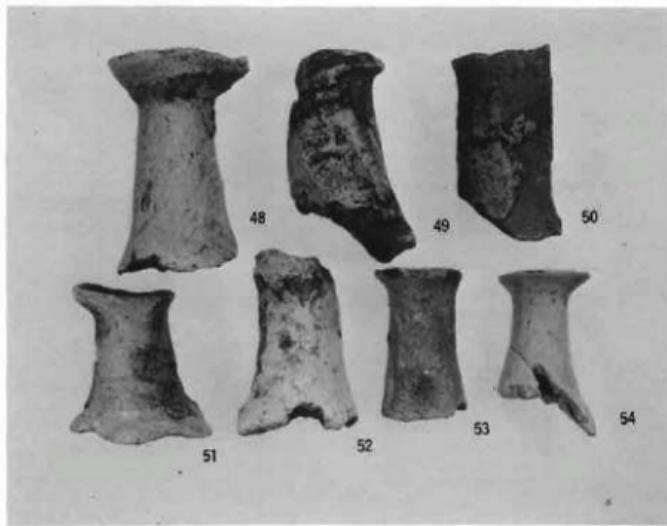
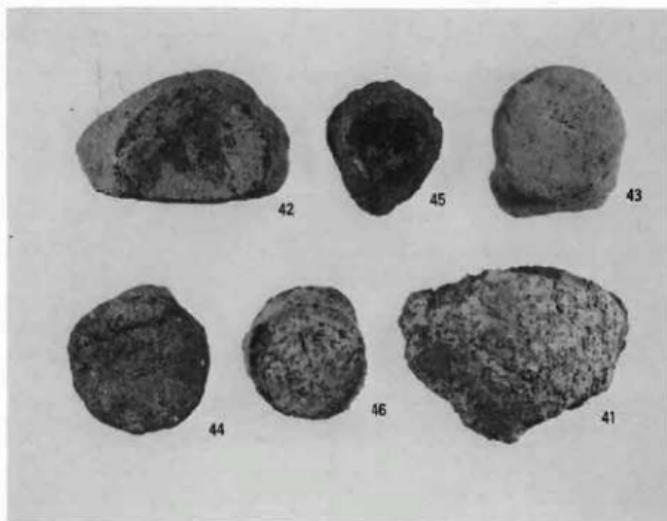
繩文包含層出土土器

圖版一七 遺物寫真③



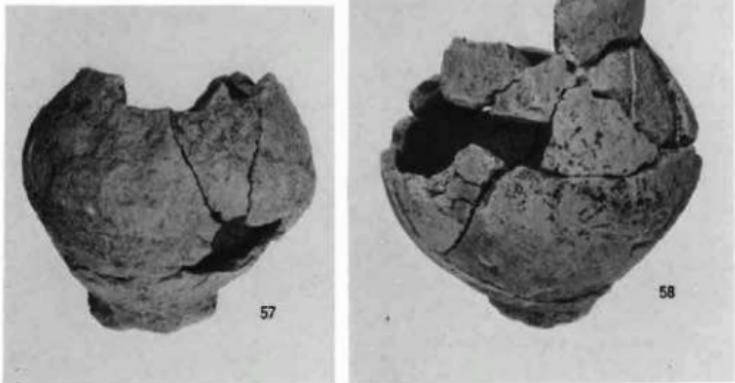
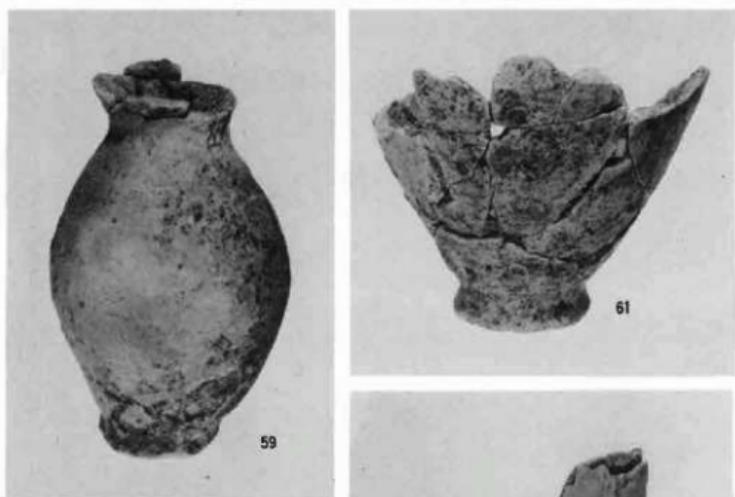
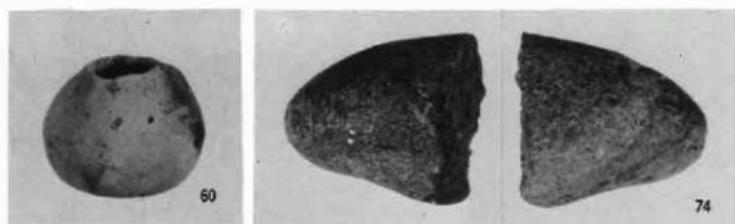
縄文包含層出土土器

圖版一八 遺物寫真④



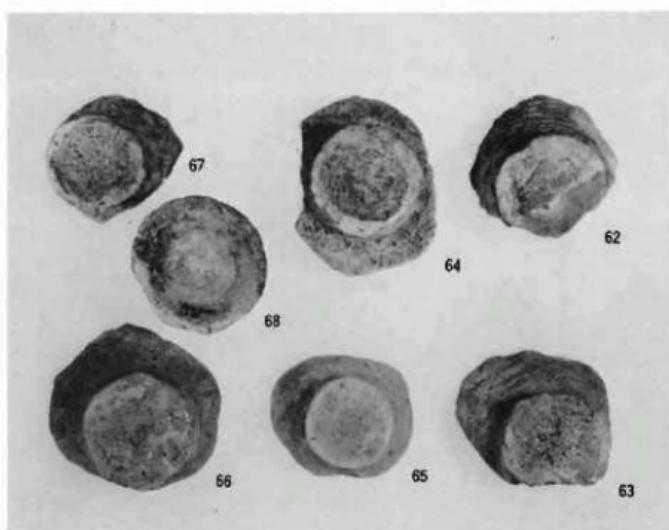
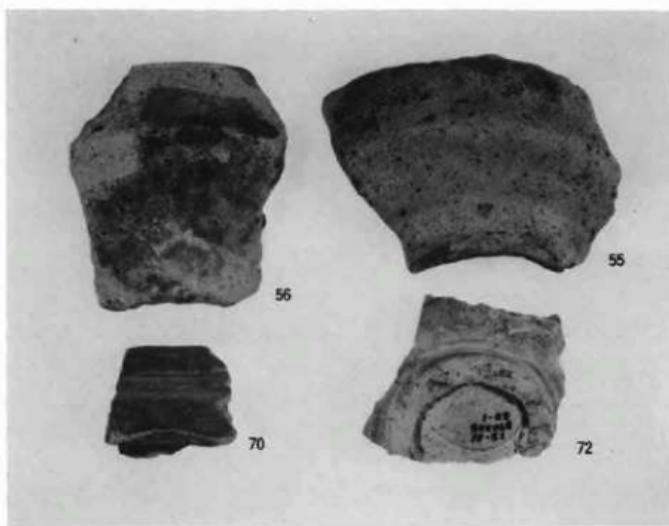
弥生包含層出土土器

圖版一九 遺物寫真⑤

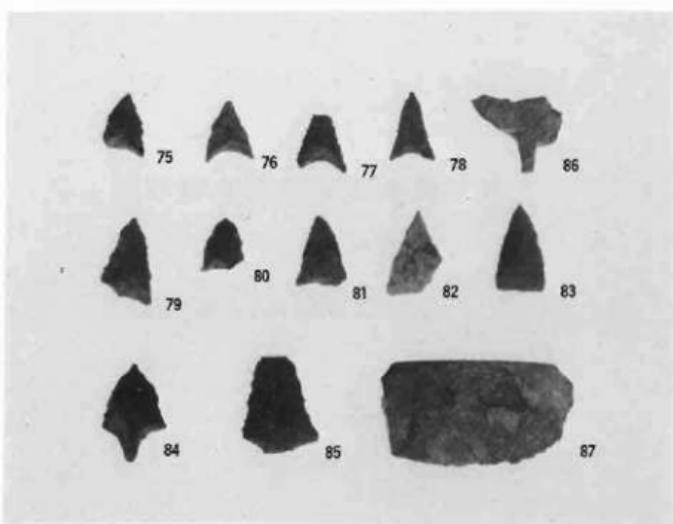
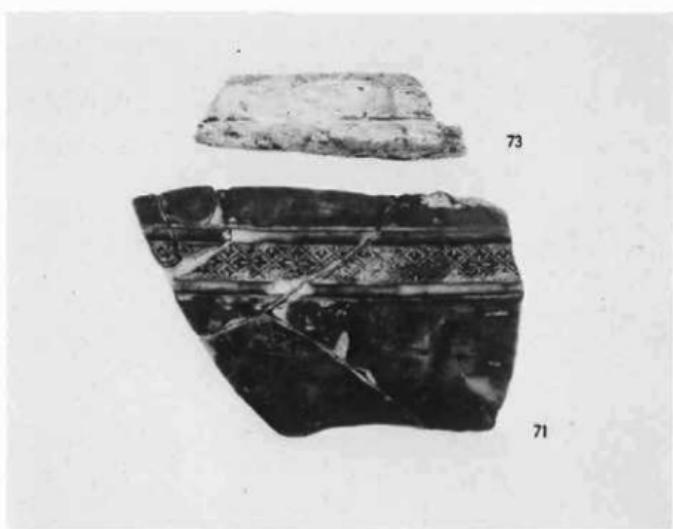


弥生包含層出土土器・石斧片 (74)

圖版二〇 遺物寫真 ⑥



勝生包含層出土土器・SZ-1出土(70・72)



縄文包含層出土石器・第II区宝町時代包含層出土遺物 (71・73)

市ノ瀬遺跡発掘調査概報

昭和62年3月

発行　社団法人和歌山県文化財研究会

印刷　邦上印刷
